

《書評》

Василий Авченко, Фадеев, Москва, Молодая
Гвардия, 2017. 366с.

寺山 恭輔*

Vasilii Avchenko, Fadeev, Moskva, Molodaia Gvardiia, 2017. 366pp.

TERAYAMA Kyosuke

ソ連崩壊後のロシア極東で一大産業に発展した日本の中古車市場を取り巻く状況、極東の人々の日本車に対する愛を語った著書『右ハンドル』（河尾基訳、群像社ライブラリー、2018年）で日本にも知られているアフチェンコが、極東の歴史にもゆかりの深い文学者アレクサンドル・ファデーエフ(1901-1956)の伝記を執筆した。ファデーエフは極東を舞台にした小説でソ連の文壇に華々しく登場し、若くしてソ連作家同盟のトップにも上り詰め、スターリンとも近かったとされる人物で、それゆえにスターリン時代の弾圧にも関与したのではないかと、1956年に自ら命を絶ったのは、フルシチョフによるスターリン批判にショックを受けたためではないかと批判されることもあった。すでに戦前からいくつかの作品が複数の訳者によって邦訳されているが(例えば戦前は『壊滅』、『ウゲデ族の最後の者』、戦後は『若き親衛隊』など)、今日まで版を重ねているものはない。日本と同様ロシアでもほとんど忘れ去られた人物となっているファデーエフが、とくにペレストロイカ時代以降に語られてきた負のイメージとは異なり、スターリン時代を共に生きた文学者仲間を可能な限り支援し、極東に対する郷土愛を終生持ち続けた人物であったとして、著者アフチェンコは本書で彼の復権を図っているのである。

作家が語る作家論であり、ファデーエフが発表した、或いは未完に終わった文学作品の内容、その登場人物の由来など詳細に検討されているが、歴史を専門とする評者にその文学論を云々することはできない。ただ、スターリンの極東政策との関係でファデーエフに関心を持ったので、その点に絞って本書を紹介する次第である。

1. アレクサンドル・ファデーエフとは？

最初にファデーエフの人生を、本書に基づいて簡単にまとめておきたい。ファデーエフの父ア

*東北大学東北アジア研究センター

レクサンドル(1862 生)、母アントニーナ(1873 生)はともに革命運動に従事、1894 年に刑務所内で知り合い、流刑地のアルハンゲリスクで 1898 年に結婚、1900 年に姉タチアナ(1927 年まで極東地方の女性部に勤務)、次いで 1901 年 12 月に本書の主人公アレクサンドル(トヴェリ近郊で出生)、1905 年に弟ウラジーミル(のちにウラジオストックのコムソモールの組織者の一人)が生まれた。1905 年に両親は離婚するが(父はエスエルを支持、1916-17 年に結核で死去)、1907 年の母の再婚相手も革命家だった。

3 人の子供と母、継父は 1908 年に極東へ向かうが、夫妻が職業とする医療助手のポストにウラジオストックで空きがなかったため、チュグエフカ村(ウラジオストックから 300 キロ)に移った。ファデーエフが終生故郷とみなしたこの村には、彼の記念館が現在も存在する。1910 年、彼はウラジオストック商業学校に入学した。この時代に彼が出会ったのが初恋の人アレクサンドラ・コレスニコヴァであり、晩年に交わした彼女との多数の手紙のやり取りが本書でもたびたび紹介され、アフチェンコはこの文通こそファデーエフの代表的文学作品にふさわしいとまで述べている。

ファデーエフがなぜボリシェヴィキに引かれたのか、その人生観に大きな影響を与えたのが、一家を極東に招いた叔母マリヤ・シビルツェヴァ(母の姉)と二人の従兄弟(フセヴォロドとイーゴリ)であった。マリヤはソ連形成後、1923 年の死まで沿海県党委員会の女性部に勤めた。フセヴォロドは 1920 年に日本軍に捕らえられて殺され、イーゴリも内戦中の 1921 年に命を落とした。

ロシア 10 月革命後、連合国によるシベリア出兵が始まり、日本軍も 1918 年 4 月英軍とともにウラジオストックに上陸した。革命派と反革命派の内戦も激化するが、干渉軍や反革命軍(白軍)に、革命側はバルチザン闘争で対抗した。反革命のボルチャーク政権が沿海地方で白軍への動員(徴兵)を開始すると、17 歳のファデーエフは 1919 年 4 月に学校をやめて、バルチザン部隊に加わり、その中で新聞も編集した。これより前の 1918 年 9 月、彼はすでにロシア共産党(ボリシェヴィキ)に入党していた。日本との衝突を避けるべくレーニンは 1920 年 3 月に極東共和国を創設した(同年 10 月、首都はヴェルフネウディンスクからチタに移転)。そして翌 1921 年 2 月にチタで開催された党協議会で、ファデーエフは第 10 回ロシア共産党大会代議員に選出され、後に元帥となるコーネフとともにモスクワに向かったが、この時彼は若干 19 歳だった。大会期間中にクロンシュタット水兵の反乱が勃発すると、コーネフとともに鎮圧に参加して負傷、5 カ月間の入院を余儀なくされた。退院後、彼は極東には戻らず、モスクワ鉱山アカデミーに入学する。校長はソ連の石油地質学の創設者グブキン、同級生にはコリマの金産業の父と呼ばれることになるビリピンがいた。在学中から文学作品を雑誌に発表していたが、1924 年 3 月には鉱山アカデミーもやめ、党活動家としてクラスノダールに派遣された。その後ロストフに移るが、この時期にゼムリャチカ、ミコヤンという、1930 年代末の粛清を生き延びることになる後の党幹部と知り合えたことが、その後の人生で大きな役割を果たした。

ファデーエフの作品のうち、アフチェンコが最良とみなす『壊滅』は、クラスノダールに移った 1924 年に書き始め、1927 年に出版された。外敵たる日本軍をロシア極東の地から放逐する過程で、

あるパルチザン部隊の中の人間模様、生活、部隊の壊滅と希望を描いたものだが、パルチザン部隊の一員としての自らの体験が存分に生かされていた。この作品が好評を博したことから、ファデーエフはモスクワによばれ、ロシアプロレタリア作家協会(RAPP)の指導部に勤め始めた。グループにはこだわらず、様々な作家と付き合い、それぞれの作品そのものを評価していたことが本書では強調されている。1932年4月に党中央委員会がRAPPを解散させると、第1回ソ連作家同盟大会への準備が進められた。この間、評者が注目するのは、ファデーエフ自身が故郷として愛着をもつ極東へ派遣されて活動したことで、この点について詳しくは後述する。極東から帰還すると1934年8月の第一回ソ連作家同盟大会に出席した。これ以後、ソ連の文壇はスターリンによる締め付けがますます強まっていくことになる。1939年2月には作家同盟幹部会書記に就任するとともに、3月の第18回党大会で中央委員会委員に選出された(この時中央委員に選出されたのは彼を含めて71名に過ぎない)。

「アレクサンドルとヨシフ」という節で、スターリンとの関係について興味深い逸話がまとめられている。1930年代後半に粛清の嵐が吹き荒れ、密告や拷問、捏造された告発で命を落とし、収容所に放り込まれた例が少なくなかったが、特に文学者の悲劇にファデーエフが関与したのではないかとの説に対して、具体的な告発者としてファデーエフの名前が挙がっているとしても、実際に彼が署名したことはなく、人民の敵として告発されそうになった仲間がいれば、危険を冒して率先して救出しようとしたこと、被害者の家族にも手を差し伸べたことなど、著者は当時の関係者の様々な発言を引用しながら証明しようとしている。さらに具体的な証明が必要かもしれないが、これだけの証言が集まっていれば、著者が当初意図したファデーエフの復権は十分なされているのではないかと感じた。ファデーエフ自身も安泰ではなく、彼に対する告発もなされたが、彼の人生でも最も危険なこの時期をなんとか乗り越えている。ファデーエフの同僚に対する支援は戦後も続き、収容所から帰還する人々への支援も惜しまなかった。アフチェンコは、「ファデーエフは自身の検察官であり、弁護士でもあった。ファデーエフによって自由を奪われたものはおらず、彼によって救われた者のリストは長大である」とまとめている。

独ソ戦争がはじまると、シーモノフやグロスマンらと同様、彼も時々前線に赴き、戦場の出来事を国民に知らせる役割を担った。その体験をまとめて執筆したのが、1945年12月に完成した『若き親衛隊』であった。その後、この執筆のために一時期退いていた作家同盟の仕事に戻り、スターリンと同じ職名たる作家同盟書記長(幹事長 *генеральный секретарь*)となった。1946年2月にはソ連最高会議代議員にも選ばれた。作家としてよりも、文学官僚としての仕事に忙殺されていた様子が描かれており、長年完成を目指していた著作も結局はものにならずに終わっている。1950年代に入ると、病気になることが多く、その不在中にソフローノフやスルコフといった、後の時代を牛耳る文学官僚たちに作家同盟内の実権を徐々に奪われていった。一方でアフチェンコは、ファデーエフがスターリンの存命中から作家同盟の在り方に疑義を呈し、より民主的な手続きを提示していたことを強調している。スターリン死後には、フルシチョフ、マレンコフに作家同盟の改善に向けて、一連の報告を提出したものの、誰にも取り合ってもらえない状況が続い

た。1954年12月開催の第2回全ソ作家同盟大会のあと、ファデーエフは作家同盟の第一書記を辞任した。いわゆるスターリン批判が行われた1956年2月の第20回党大会で、ファデーエフは中央委員会委員候補に降格された。そして同年5月13日、作家が集住するペレデルキノ村の別荘でファデーエフは拳銃自殺を遂げることになる。遺書が残されていたが、それが公開されたのは30年以上経過した1990年のことで、その全文も本書に収録されている。フルシチョフやマレンコフらスターリン死後の党指導部に対する激しい批判を述べたものであり、遺書が長年にわたり秘匿されていた理由がよくわかる。ファデーエフの党指導部に対する訴えかけが真剣なものであり、スターリン批判を行ったフルシチョフが改革者として評価されるのに、血まみれのスターリニストとしてファデーエフが批判されているのは、誤っているという著者の主張には首肯すべきところがある。

2. 極東への派遣

上述した通り、ファデーエフが極東へ派遣された経緯、当時の状況について、他の文書集も参考にしながら改めて考察することにするが、その前に、スターリンとの関係について把握するため、ファデーエフがスターリンの執務室を訪問した日時、同室者について次の表1にまとめた。

表1からわかる通り、ファデーエフは1929年に初めてスターリンの執務室を訪問したが、1933年から39年まで6年ほど訪問の記録はなく、戦後は1949年まで訪問していたことがわかる。初めはRAPPの関係者との訪問が多かった。[もちろん、スターリンの執務室以外での面会の可能性もある]

さて本書に戻るが、1933年8月29日、映画監督ドフジェンコとともにファデーエフは極東に向かったが、スターリンの個人的な注文で『Аэроград(空の都市)』を撮影するためだったということになっている。ファデーエフは脚本を担当していたが、結局、脚本はドフジェンコ自ら執筆したようだ。

彼らの極東派遣の経緯を別の文書集からたどってみよう。この時期のソ連の映画産業が置かれていた状況について再検討する決定がなされたのが1931年12月8日であった(注2)。この決定によれば、革命前に都市には映写機が1045個あったのが、1931年7月1日現在9000に増加し、農村における映写設備はゼロから16500へと増えた。それでも少ないので、1932年初頭の映写設備3万台を1年後には7万台にまで増やすことを目標とした。1932年に1000人を収容する映画館を労働者の多いセンターに30館建設し、動員数を10億人から1年後には20億人に増やすこと、ソユーズキノ[国家映画産業委員会]は1932年に5000万メートルの映画撮影用フィルムを生産すること、関係する企業は設備の製造に協力すること、技術学校の設立を含め、映画産業を担う人材を育成することなど、詳細に定めている(Кремлевский кинотеатр.но.29.)。

翌1932年4月4日にソユーズキノの議長シュミヤツキーが党中央委員会組織局で1931年の活動を総括したが、組織局は1932年にどのような映画を製作するのか、小委員会(議長ブブノフ)

表 1 《ファデーエフがスターリンの執務室を訪問した日時》

日時	時間	同室者等の追加情報
1929/10/22	時間不明	入退室時間ははっきりしないが、ファデーエフは 2:45、すなわち翌 23 日深夜に退室。同時期に部屋にいた可能性があるのは、オシンスキー、キルシオン、ネステロフ、ルミャンツェフ、ドヴレニエフ
1930/11/19	15:15-17:45	同室者はキルシオン、パンフオーロフ、アヴェルバフの 3 人
1931/6/2	17:40-20:30	同室者は 10 人。Мол、Каг、Пос、アヴェルバフ、ゴロホフ、プアキツェ、キルシオン、コヴァレンコ、マカリエフ、ストゥイリン
12/6	19:25-21:10	アヴェルバフ、キルシオン、アフィノゲノフ、マカリエフ、ベツァ・イレーシュ、スルコフ、メフリスと同時に入室。その前から部屋にいたのが、Каг、Пос。
1932/5/11	16:20-21:10	キルシオンと入室、ステツキー、グロンスキーの二人はその 20 分前に入室、アヴェルバフが 16:55 に加わる。16 時前から Каг が部屋にいた。
1933/5/31	17:55-19:40	アフィノゲノフ、ジガ、スッポツキー、パヴレンコ、スタフスキー、ベレゾフスキー、キルシオン、ベズィメンスキー、グラトコフ、キルボーティンと入退室。13 時過ぎから部屋にいたのが Каг、Мол、Вор の 3 人。ステツキーが 17:30 より部屋にいた。
1939/1/25	19:05-22:05	ドゥケリスキーと入室。その前から Мол、Жда が部屋にいた。
1/27	(28 日) 0:20-1:30	パヴレンコと入室、10 分遅れてベリヤが入室。23 時から部屋にいたのが、Мол、Жда、Мик。彼らは 2 時過ぎまで部屋に残った。
1/31	21:25-22:05	パヴレンコと入室。17:25 に Жда が入室、18:00 以降に Кал、Вор、Мол、Анд、Мик、Каг、シキリヤトフ、シチエルバコフ、ヤロスラフスキー、Мал が部屋にいた。
5/20	17:55-18:25	10~15 分ほど早く入室していたのが、Анд、Мик、Мал、Жда。
1946/6/25	23:30-1:15 (26 日)	Воз、Александров、カフタノフ、ボリシャコフ、フラブチェンコ、エゴリノと入室。 Бер、Мик、Мал、Жда は 22:00 ごろ入室していた。
1947/5/13	18:00-19:20	Мол、Жда、ゴルバトフ、シーモノフと同時に入室。ゴルバトフ、シーモノフと同時に退室。Мол は 21 時過ぎまで部屋にいた。
1948/3/31	22:00-00:10 (4 月 1 日)	Мол、Жда、Бер、Бул、Мал、Каг、Воз、Мик、スースロフ、シーモノフ、ヴィシネフスキー、パンフオーロフ、ドルージン、イリイチェフ、シェピーロフ、レベデフ、ボリシャコフと同時に入退室。
4/17	22:15-00:10 (18 日)	同時に入退室したのが、レベデフ、シェピーロフ、イリイチェフ。21 時より部屋にいたのが、Мол、Бер、Бул、Воз、Жда、Каг、Мал、Мик、ボスクリョーブイシェフ。彼らは 1:20 まで部屋にいた。
1949/1/29	23:00-23:20	フェドセーエフと同時に入室。21 時から部屋にいたのが、Мол、Бер、Бул、Воз、Мал、コスイギン、パヴロフ、メニニコフ、クルグロフ、ボポフ。

* (政治局員などスターリンの側近で頻繁に名前が出てくる主要な国家指導者は略語を用いた：Мол はモロトフ、Каг はカガノーヴィチ、Мик はミコヤン、Жда はジダーノフ、Анд はアンドレーエフ、Вор はヴォロシーロフ、Бер はベリヤ、Мал はマレンコフ、Кал はカリーニン、Бул はブルガーニン、Воз はヴォズネSENSキーを指す。入退室の時間については、会合が深夜に及ぶことが多かったため、退室時刻が翌日になることもあった。スターリンと彼に最も近い側近グループがいる部屋に、関係者が呼ばれて会合に参加し、話が終われば先に退室するというのが通常のパターンである。)(注 1)

を設置して検討させることにした(Кремлевский кинотеатр.но.33.)。これを受けて 4 月 15 日、党中央委員会組織局の映画小委員会委員長のブブノフが、1932 年の計画をカガノーヴィチに報告した。長尺の芸術映画のテーマ、作家、脚本家、映画監督のリストが提示され、15 のテーマが列挙されている。注目すべきは、II. レニングラード、III. ツァリーツィン、IV. コムソモールなどを抑えて、I. 「極東」が筆頭のテーマに掲げられていたことである。15 の課題それぞれ

に脚本家が提案されたが、「軍事テーマ」とされたⅠ—Ⅲには、10人の作家がリストアップされ、ファデーエフの名前が最初に出てくる。この「軍事テーマ」の監督候補として7人が提起された。極東問題に関する小委は、1. 委員長ポストウイシェフ、2. ガマルニク、3. トリリッセル、4. シュミヤツキー、5. ファデーエフ、6. ヴャチェスラフ・イワノフ、7. コリツォフから構成されており、いずれも極東と関係の深いメンバーで占められていたことがわかる(Кремлевский кинотеатр. но.34.)。表1にもある通り、この決定のあとで1932年5月11日にファデーエフらが、スターリンの執務室を訪問していることも注目すべきである。反ボリシェヴィキ勢力と日本のシベリア出兵に対抗して闘うパルチザン部隊を小説「壊滅」で描いたファデーエフこそ、日本からの新たな干渉の危機を前に、文学の面からソ連国民に準備を促す役割を担わせるのに適任だとスターリンは考えたのではないだろうか。

以上のような経緯を経て、1933年8月にファデーエフらは極東へ向かうことになった。9月6日にハバロフスクに到着した際にファデーエフは、ソ連作家同盟の極東組織委員会の会議で、「極東のテーマは今や、その枠組み、規模、国境を越えた国際的なテーマになりました。・・・最も大きな問題、最も面白いテーマとは、極東の社会主義的改造や、ツァーリ時代の徒刑と流刑の地域を、太平洋における要塞へと作り変えることを目指した闘争です。この改造を見せること、きわめて興味深いこの地域にソ連の隅々からやってきて仕事をしたいと人々に思わせること、まさにそのように示すことがあなた方の将来の作品の主要テーマなのです」。

これこそ、まさにスターリンが作家や、映画監督らに課した課題だったのではないか？ 映画産業の強化は1931年前半から検討されていたが、その最中の1931年9月に満洲事変が勃発し、翌1932年に、突如として満洲国が出現したため、シベリア出兵の再来を懸念したソ連は急いで国防力強化と人材、物資の派遣を大々的に展開し始めた(注3)。ところが労働力の確保に苦勞しており、国家の隅々に設置が計画されている映写機を通して極東の厳しい現状をソ連国民全体に訴えるべく、文学者や映画関係者にもその支援を求め、極東にも詳しい上記小委のメンバーにもアイデアを募ったのである。

ファデーエフがハバロフスク滞在中の1933年秋に、「На рубеже」(国境で)という名の総合雑誌が刊行されるが、彼もその創刊、雑誌名の考案に携わった。1933年11月26日に小委の委員長ステツキーが、映画小委の活動についてスターリン、カガノーヴィチに行った報告からも、ファデーエフが監督ドヴジェンコとともに極東地方について映画を撮っていることがわかる(Кремлевский кинотеатр.но.58.)。1934年の新年をファデーエフとドヴジェンコはコムソモリスト・ナ・アムールで迎え、続いてハバロフスクでは第11回極東地方党協議会にも参加している。1934年3月22日にステツキーは、ファデーエフが極東問題について脚本を書いているとカガノーヴィチ、ジダーノフに報告していた(Кремлевский кинотеатр.но.63. 彼と並んで極東に取り組んでいたのがブリーシヴィンだった)。

極東から首都に戻ったファデーエフは、1934年6月、国防芸術文学に関する全ソ協議会で報告した。アフチェンコがそれを引用している。「とても奇妙な矛盾が生じていることを考慮して

ください：我が国、社会主義の事業に対する直接の脅威たる深刻な軍事的危険が極東の方から垂れこめているのに、極東については我が共和国の他の地方、州と比較してはるかに稀にしか見聞記や詩が書かれていないのです。例えば中央アジアはとても恵まれています。長編、中編小説、見聞記などおびただしい数に上りますし、詩も書かれています！そのうえ、優秀な芸術家がこれに参加しています。ところが今や世界の対立の大きな結節点となっている極東については、ほとんど何も書かれておらず、あったとしてもすでに古臭いものです・ソ連の一般市民、普通のコルホーズ員、労働者にとって極東とは、どこかとても遠いところ、とても居心地の悪いところ：ちょっと北の方の、ちょっとタイガのあるところといった印象を持たれています。ウラジオストックはスフミヤニースと同じ緯度に位置すると話せば、ソ連市民は誰でも驚くでしょう。サハリンがモスクワよりも南にあると知れば彼はもっと驚くでしょう。彼にとって極東はこの上なく辺鄙で、すさんだ辺境なのです。そして歴史的に遅れていたものの、現在それを克服しつつある極東地方が、今現在世界的事件の中心にあるということがわからないのです。それは次のような多数の人々と国境を接しています。きわめて強力な革命的生活を生きている中国人・日本の帝国主義と永遠の革命的闘争を行っている朝鮮とも極東は国境を接しています。最も凶暴な拡張主義をとる、最も進んだ帝国主義国家の一つである日本のような国とも国境を接しています。極東に行けば、人は人里離れた辺境に來たのだとは感じず、逆にあらゆる世界的な対立の絡み合いを実感し、世界の中心の一つにいるのだと感ずるでしょう」。

スターリンがファデーエフらを招いて訴えたかったのは、まさにこのように文学作品や映画を大々的に動員して、極東地方へソ連国民の注意を喚起させることであったといえるだろう。

エイゼンシュテインの映画『アレクサンドル・ネフスキー』の脚本も書いたピョートル・パヴレンコは、表 1 にある通り、ファデーエフとともに 1933 年と 39 年にスターリンの執務室を訪問しているが、1936-37 年に執筆した『東方で』という長編小説について、「ファデーエフがいなければ、この本も書かなかっただろう」と述べている。この小説で新しい町コムソモリスク・ナ・アムーレ〔対日戦争に備えた軍需基地としてハバロフスクの北方に満洲事変後に建設が始まった〕の出現と将来の日本との戦争を描いた。ファデーエフは、第 1 回ソ連作家同盟大会後にも、1934 年 9 月から、翌 1935 年 8 月まで 1 年近く、極東を訪問している。

極東とファデーエフの関わりに注目して、アフチェンコの著書を紹介してきたが、この他に極東問題については、例えばセルゲイ・ラゾにまつわる歴史的事実について疑義を呈している。尼港事件を引き起こしたトリャピーツィンの部隊には、ファデーエフの仲間が一時期所属していたこともあったようだが、これについてもアフチェンコはまだ研究の余地があると述べている。同じ極東を代表する作家ウラジーミル・アルセーニエフとはすれ違い、二人が会うことはなかったが、極東の少数民族に対する理解や、ファデーエフが受けた影響、二人の違いについても述べられている。作品内容の紹介とともに、ファデーエフの謙虚さを示す事例が多数提示され、スターリンの伝記を誰が執筆するかが問題になった際、ファデーエフが拒否したことについても言及されている。スターリンと極東、文学や映画との関係についてさらに検討が必要である。

注

- (1) *На приёме у Сталина. Тетради (журналы). записей лиц, принятых И.В.Сталиным (1924-1953 гг.). Справочник*, Москва, Новый хронограф, 2008.
- (2) 1931年5月21日、カガノーヴィチの提案により党中央委員会書記局は「ソユーズキノ [国家映画産業委員会] の活動、幹部について」検討し、党中央委員会党宣伝・扇動部長ステツキーらに検討を委ねた。この問題が党中央委員会組織局で検討されたのが1931年9月16日のことで、カガノーヴィチは、ここ2年の間、ソユーズキノの活動は停滞し、この巨大な社会主義建設期に真面目な映画が一つも撮られていないと述べ、またもやステツキーを委員長とする委員会に人を集め、政治局での承認を得るべく、改善案を提出するよう求めた。政治局はこの問題を同年10月25日、11月15日と2度にわたって検討し、最終的な編集をカガノーヴィチらをメンバーとする小委に委ねていた(*Кремлевский кинотеатр 1928-1953 документы*, Москва, РОССПЭН, 2005, no.29. прим.)。
- (3) この過程については、寺山恭輔「満洲事変とスターリン、ガマルニク」寺山恭輔編『スターリンの極東政策：公文書資料による東北アジア史再考』(古今書院、2020年)31-68頁を参照のこと。